

日本の中国研究家の語る毛沢東主義の本質

べ・ポスペーロフ

哲学博士候補

中国の事態は、日本の中国研究家たちのあいだでさまざまな評価を下されている。日本の親毛沢東的な傾向の中国研究家たちは、客観的な科学的立場から中国の事態を評価しよぐとする著名な哲学者や社会学者の一団と対立している。

この傾向の代表の一人に東京外語大学教授の中嶋嶺雄をあげることが出来る。かれは、毛沢東主義の反マルクス主義的考え方を暴露することに大きな貢献をした。この書評にとりあげるかれの著書『現代中国論』

は、一九六六年に初めて日本で出版されて以来、六版を重ねた。この最新版には、「文革」期の中国の出来事を紹介し、最近のこの国の内政的進展を総括する幾つかの章がつけ加えられている。本書最新版の序文には、著者がすでに一九六六年に毛沢東主義に下した評価の正しかったことが主として時間の経過によって裏づけられたこと、以前に著者が到達した毛沢東主義の本質についての結論の正しかったことが中国の最近の出来事によってあらたに裏づけら

れたことがあげられている。いいかえるなら、本書は時の試練に耐え、著者の基本的概念は現実によって裏づけられているということだ。これらのことはすべて、本書が科学的長所をもってしている証拠であり、著者の科学的方法が実を結んでいることを確認するものである。

* 中嶋嶺雄『現代中国論——イデオロギーと政治の内的考察』、青木書店、一九七一年増補。

本書の基本的な目的は、毛沢東主義の思想・政治的・哲学的内容、反マルクス主義的思想・政治潮流としての毛沢東主義の形成過程を研究することである。毛沢東主義はマルクス・レーニン主義の継承したものでなく、ましてやそれを発展させたものではないこと、毛沢東の思想体系は、伝統的な中国的世界観のプリズムを通じて認識され、二〇世紀の中国の現実の条件に適應されたさまざまな小ブルジョア的概念の折衷的な寄せ集めにすぎないことが、本書では明確に述べられている。

著者がこのような結論に達したのは、毛沢東の思想・政治的見解の由来とマルクス主義にたいするその態度を詳細に検討した結果である。

毛沢東は「思想的転換を自覚する以前のためまるしい思想遍歴の過程で自己の胎内に吸収してきたマルクス主義とは基本的に相容れない思想諸潮流や人間像にたいして、このと

きの毛沢東がいかに対応ないしは対決したかがまず問われねばならないであろう」(三二ページ)と、著者は指摘している。

毛沢東の世界観に大きな影響を与えたのは、啓蒙運動および辛亥革命の時期の中国の自由主義的なブルジョア活動家の見解であったと、著者は書いている。毛沢東は、「孫文よりもむしろ改良派の康有為や梁啓超の主張に共感を覚え、……李大釗や魯迅ではなく、胡適や陳独秀の讚美者になった」(三二ページ)と、著者は強調している。マルクス主義を学びはじめた当時の毛沢東のひどく狭小な思想的・理論的知識についていえば、マルクス主義にかんする論文を幾つか知っているだけという毛沢東の信念の中には、マルクス主義をその統一的な全体として理解することができるといふ思想の基盤をみいだすことはむずかしかつた。

マルクス主義の歴史においては、

ブルジョア概念にはぐくまれた小ブルジョア層の出身者たちが、革命の実践の過程でマルクス・レーニン主義理論の根本的な学習にもとづいて、マルクス・レーニン主義の立場にしつかりとどまった例は少くない。周知の通り、毛沢東にかんしてはこういうことは起こらなかった。中国農民の反封建運動の経験にはぐくまれた毛沢東は、社会主義革命および労働者階級の革命運動における指導的役割にかんする理論としてのマルクス主義の本質を理解するまでに成長するに至らなかった。毛沢東は労働の同盟が必要であると再三宣言しているにもかかわらず、毛沢東にとつてはこのような同盟のレーニンの認識は無縁であつたと、著者は指摘している。「プロレタリアー主体的であつたレーニンの労働独裁の理論にたいして、毛沢東の労働同盟の理論はあくまでも、農民主体的であるということができるのであ

る。……毛沢東の労農同盟の理論がレーニンの理論の継承によってではなく、ひたすら、農民運動の経験のなかで生みだされた土地革命のヴィジョンに依拠して形成されたものである。……」(三五―三六ページ)。

農業革命の成功はブルジョア民主主義革命の過程で旧農業生産方式を根本的に粉砕することにかかっていると、マルクス・レーニン主義理論は教えている。労働者階級はこの革命の指導的勢力として行動しながら、この革命を科学的共産主義理論に従って農業問題をすっきり解決する社会主義革命へと変質させる。本書から明らかなのは、農業革命の本質のこのような認識が毛沢東には無関係だということだ。毛沢東の農業問題にかんする理論の性格は小ブルジョア的であり、毛沢東の農業改造手段の考え方は中国農民の伝統的な觀念の習得にもとづいてまったく経験的に組み立てられたものである

と、著者は指摘している。「毛沢東の思想」は太平天国の乱の教え、中国農民社会の特徴を多かれ少なかれ反映している康有為の見解と同じ系統のものである。

著者は毛沢東主義の思想的出発点とマルクス主義にたいするその態度とを分析することによって、毛沢東主義とマルクス主義とのあいだに線を画し、毛沢東主義をマルクス主義とは共通のものは何一つもない理論だと規定する根拠をもったのである。「毛沢東の革命思想は、そもそも、マルクス革命思想とは、あまりにも遠い地点にあったといわざるを得ないだろう。つまりマルクスの思想は、毛沢東において完全に断絶していたのであった(四六ページ)。

ブルジョア理論家や修正主義的理論家たちは、毛沢東主義を「中国化されたマルクス主義」だとしている。かれらはマルクス主義の普遍的真理を否定し、マルクス主義の「民

族的」な変形が存在しうると理論づけようとしている。このような試みは、世界共産主義運動の思想的・理論的基盤を弱め、その統一を損おうとする目的に奉仕するものである。

著者にはこのような立場は受け入れがたい。著者は、毛沢東主義の本質を「中国化された」マルクス主義だとする反マルクス主義的評価を批判している。マルクス主義を地域的、民族的な所属にもとづいて分けることはできない。マルクス主義がそれぞれの国においてそれぞれの出発点と法則性をもっていたとすることは許せることではない。マルクス主義は創造的であればならず、各国の狀態の民族的、社会的特徴を考慮しなければならぬが、マルクス・レーニン主義理論の一般的法則は唯一であり、すべての国に普遍のものであると、著者は指摘している。

著者は、毛沢東主義を反マルクス主義的潮流とする全体的な評価にと

どまらず、その内部構造と思想・哲學的内容を規定するその方法的原則を分析している。毛沢東主義の考え方のもっとも重要な方法的原則と主要な要素は經驗論であると、著者は考えている。著者の考えによれば、このような經驗論の出発点となつてゐるのは、觀察と個人的經驗を現実認識の出発点とみなす中国の哲學的伝統である。經驗論は系統的な一貫した論理をもたないので、普通一般にはプラグマティズムにおちいる（七三ページ）。毛沢東一派内外政策が何回となく急転回したのも、まさに現実にたいするこのプラグマティックな態度によるものであると、著者は説明している。

著者は、毛沢東の認識論に全面的な批判を加えている。かれの認識論の基本は經驗論、現実認識における理性の媒介的役割を事実上否定するものである。毛沢東主義の特徴は、根本的にマルクス主義的真理と矛盾

するプラグマティックな真理概念であると、本書では次のように強調されてゐる。「マルクス主義は社会的実生活における經驗を無視するものではない。しかしマルクス主義は決して經驗に拝跪しない。マルクス主義はあらゆる經驗を包摂しながらも、なお、それらの經驗を超越した地点に確乎たる普遍性をア・プリオリに確立する……これにたいして經驗主義は……經驗的な事実の集積のみによつて自己を完結し、そこでは実践による成功が真理の唯一の標準となる」（七〇ページ）。

結局、經驗論、プラグマティズム、伝統的形而上学的概念への追隨といったものが、著者の力説している毛沢東主義の若干の重要な特徴なのである。著者の着手しているこの潮流の哲學的内容の分析は、その反マルクス主義の本質を暴露するための補足的資料を与えている。

毛沢東主義は、現代の世界的發展

のもっとも主要な問題をどのように扱つてゐるのか。これは本書に言及されてゐる問題の第二の領域である。戦争と平和の問題にたいする毛沢東主義の態度に大きな注意が向けられてゐる。著者は、この問題において北京指導者たちの立場をきつぱりと批判してゐる。原爆紛争を始めるといふ毛沢東一派の呼びかけの中に著者がみてとつてゐるのは、戦術行動でも、心理戦争の方法でもなく、ましてや外交手段でもない。著者によれば、この戦争方針とは、毛沢東主義の反マルクス主義的、反人道主義の本質に由来する毛沢東主義の本能的特徴なのである。「中国共産党はいまなお戦争不可避論の立場から……現代マルクス主義が切開し得た新しい展望……にたいする全面拒否の回答として提示してゐるところにこそあると思われる」（二五五ページ）と、本書では強調されてゐる。

毛沢東一派は中国を兵營に変え、核

能力を強化している。「中国の指導者が企図する衝動は客観的には、世界平和にたいする重大な挑戦ともなりかねないと思われる」と、心配気に書かれている(二五五ページ)。

毛沢東一派の考え方が科学的に根拠薄弱なことは、現代の評価にとくにはつきり現れている。周知の通り、毛沢東一派は現代世界における力關係にたいする世界的社会主義の決定的な影響力を否定し、民族解放運動を基本的革命勢力とみなしている。現代の基本矛盾を、一方では革命的諸国民同士の、他方では帝国主義と「社会帝国主義」とのいわゆる矛盾だとしている。

毛沢東一派は主要矛盾にかんする自分たちの考え方を立証するための基本的論拠として、民族解放運動の地帯には圧倒的に多い住民が住んでいる事実を挙げている。著者はこのような毛沢東一派の主張に触れて、次のように指摘している。毛沢東一

派の理論家たちはこの問題を扱うに当って質的な面を量的な面にすり替えており、かれらは現代世界の現象を分析する階級的アプローチを忘れていたため、現代の基本矛盾を理解できないでいる。「今日の時代の基本矛盾がまさに社会主義と資本主義の対立に収斂され、それが時代の発展方向を本質的に規定し、歴史の現段階に鋭く刻印されている」(二六七ページ)。

北京の宣伝は、「毛沢東思想」と革命的推移にかんする毛沢東の考え方を後進諸国の模範だとしようとしている。毛沢東理論の「普遍性」を証明するブルジョア理論家や修正主義理論家たちは、声を大にしてこれに同意している。

小ブルジョアシーを民族解放運動の基本勢力とみなし、この運動を世界的社会主義や国際労働運動から切り離そうとしている毛沢東の民族解放運動にかんする考え方の反マルク

ス主義的内容を暴露して、著者は次のように書いている。「今日の歴史的条件においては、資本主義の未発展によってプロレタリアートの生成が未成熟ではあっても、民族ブルジョアシー、農民、知識人、都市小ブルジョアシーなどの中間層とともに形成される広範な同盟が、社会主義世界体制との相互関連のなかで、後進国革命の将来のパターンを規定する有力な基盤にもなり得よう」(二七三ページ)。

本書においては、民族解放運動と国際労働運動との密接な同盟が必要だということが世界経済発展の特殊性によって次のように裏づけられている。「今日の後進諸国にたいする国際独占体の滲透は、不可避免的に本国における国際独占資本主義の発展方向と関連しているのであって、民族解放闘争自体、先進諸国のプロレタリアートによる反独占闘争との不可分な相互認識的・有機的統一にお

いてとらえられなければならないのであろう」(三七九ページ)。

民族解放運動の推進力に坎するこのような評価は、マルクス・レーニン主義理論に由来しており、解放闘争の既得の経験を反映している。だからこそ、毛沢東の考え方にたいする著者の次の評価は完全に根拠のあるものとなっている。「後進諸国が社会的進歩の開拓する道は、きわめて多様であるとの認識が前提されなければならず、すべてを民族解放武装闘争の中国的典型に結びつけることはできない……」(二七九ページ)。毛沢東のイデオロギーのもっとも重要な要素の一つは民族主義である

東のすべての試み——「人民公社」、「大躍進」、その他——の基本には、「民族意識の昂揚」があった。著者は、毛沢東一派が直接の政治目的の設置の際にも民族意識の昂揚を配慮し、それを民族主義へと異常発展させようとしていると指摘している。最後の章は、世間周知の「文革」の理由と内容を明らかにしている。この「革命」は毛沢東理論の論理的結果であり、毛沢東主義とは「行動において」何であるのか、毛沢東主義とは中国人民に何をもたらすのかをはっきり示した。この革命は、党と国家の政治路線を変更するための「毛沢東一派の奪権闘争」である

いたことを、著者は立証している。本書では、中国共産党第九回全国代表大会の結果が分析されており、その準備に当って民主集中制の原則が言語道断にも破られたことが指摘されている。著者は、この大会で採択された中国共産党規約を批判して、この規約には国家建設の任務と経済政策の正確な規定が欠如していると指摘している。著者はまた、毛沢東の考え方が「文革」期にどのように利用されたかを追求しようとしている。著者は、「造反有理」と悪名高き「大衆路線」という毛沢東のスローガンの内容と使命とを分析している。これらの「スローガン」についてブルジョア理論家や修正主義の理論家たちは、いかに多くの中傷と憶測を語ったことか。若干のものたちはその中に、「大民主主義」、国家権力の「抑圧的役割」からの人間の解放への呼びかけをみてとった。著者はこのような主

張に批判を加えて、「造反有理」のスローガンを初めて毛沢東が提起したのは延安時代であり、このスローガンをブルジョア・地主分子にたいして利用しようとしたと書いている。この主張の信憑性についてはしばらく置くことにしても、「文革」期におけるこのスローガンの使命についての著者の指摘は正しいといえる。著者は毛沢東一派の小ブルジョアの考え方に起因するこのスローガンの無政府主義的内容に注目しているのである。

「大衆路線」についても同じことがいえる。著者は、この「大衆路線」が現実に人民の利益を反映する政策を実現しようとする幾つかの条件を挙げ、中国ではこれらの条件のうち一つとしてみだされていけないことを確認している。民主主義的原則が順守されて初めて正しい政治路線がありうるのだと、本書には書かれている。そうでなければ、正しい政治

路線も「大衆を操作する」機構となり、大衆の「主観的活動」に盲従する「主観主義的政治策動」となってしまう。このように、「大衆路線」は「政策の道具」となっている。現在中国で観察されうることはまさにこのような状態なのであると、著者は述べている（七六ページ）。

以上が、本書に言及されている毛沢東主義の理論と実践の若干の問題である。著者は本書で毛沢東の考え方に論争をたたきつけることによって、毛沢東主義を反マルクス主義的潮流として暴露することに成功している。

本書の科学的な成果を述べてきたが、同時に、若干の苦言を呈して置きたい。毛沢東の「自力更生」方針が打ち出された原因にたいする著者の見解には、反論がある。著者がこのような意見を述べているのは、ソ中関係の性格および抗日戦とその後の時期のソ連による対中援助にか

んする必要な情報が著しく不足しているからだと思われる。中国において毛沢東崇拜が現れた原因と状況についての解釈には、もっと正確で深い分析が必要である。本書で述べられている「毛沢東思想」の由来と性格にかんする叙述は、中国の個人崇拜が中国独特の土壌、独特の社会・政治的条件下で、伝統的な小ブルジョアの観念に強く影響されて発生したのだという結論にいきなり到達している。中国革命の国際的な面や中国共産党と兄弟的共産主義政党との関係も、もっと正確に扱う必要があると思う。

著者が本書を執筆するに当たっては、中国にかんする膨大な量の文献を研究したことはいうまでもない。補足資料として、とくゞソ連の研究者たちの研究したものを利用すれば、日本の中国学研究の著名な代表者といえる著者による本書の科学的水準は一層高いものにならう。